會報

昭和十五年十月　98　日本山岳會

朝日岳登山道の荒廢

塚本繁松

この夏は北アルプス北半に於けるお花畑を巡禮して見たいと計畫をたてゝ見たが、何處を出發點とすべきかに大いに迷つた。始めから何度も通つた道を行くのではどうにも乘氣がせず何度も地圖をにらんでゐたが、風吹大池を起點と決定するに及んで油然と山氣が動き、子供のやうに興奮して夜も眠れない程であつた。風吹大池といふのは白馬大池の北方一里餘りの所にあり、以前から一度は行つて見たいと思つてゐたが此處の文獻は一向に見當らずどんな所だか知る由もなかつたが、たまゝ一昨夏中村清太郎畫伯が蓮華温泉から往復された話を伺つて幾分樣子も知れてゐた。しかし私の行程である姫川口の北小足からの道程は、現地に到る迄は遂に知る由がなかつたのである。登山口來馬で聞くと此處は高橋健治氏が夫人同伴で何度も登つて居られるさうだし、田中阿歌麿子も舟で湖水を調査して居られる事を知つた。それに來馬の青年連が毎年蓮華温泉まで登山道の草刈を行ふさうだし、今年はつひ數日前にそれの濟んだ後だとの事で、一人旅の身には何より有難かつた。今年は登山者があつたかと聞くと一組だけあつたとの事で閑寂の程が偲ばれる。私の登つた八月の五日はお晝近くから相憎の大夕立で、池の傍を通つた頃は横を向く事も出來ない程のどしやぶりだつたので、殘念乍ら寫眞一枚撮る事も出來ず、十分に觀察する事が出來なかつたが、岳樺や白檜雨がやんだ後に林間からかいま見た朝日岳の豪邁な姿やよく發達した森林など、何時も乍らの私の性質ではあるが、秋あたり再遊して見たい氣が濃く湧くのであつた。此處は大糸線が全通した曉は、蓮華温泉を中心にして中々面白いコースとなるであらう。こゝは朝來馬を出ればゆつくりして一日で蓮華温泉へ達する事が出來、或は足の餘程早い人ならば半日行程と言へるかも知れない所である。地形圖の信州側の道の記號は現在の道と違つてゐるが、途中迷ふやうな所は一ケ所もない。

夕刻びしよぬれになつた儘蓮華温泉に着き、お湯につかつて冷えた身體を温めた。翌日は瀬戸川を渡つて鑛山道を行き、雪倉と鉢ケ岳の鞍部へ出ようとしたが、鑛山事務所跡あたりから霧に卷かれて見通しがきかず、たうとう鉢ケ岳の一番高い所によじ登つてしまつたのには自分乍ら苦笑した。この鑛山道もすつかり藪になつてしまひ、それに昨年迄あつた事務所の建物も倒れてしまつたので今ではやさしい道とは言へなくなつてしまつた。この道を下りに利用するのだつたらまだいいであらう。この道は蓮華温泉では白馬からの下山路に薦めてゐるのだから朝日岳の道と共に毎年夏の初に草刈ぐらひはする事が是非必要だと思はれる。

白馬の頂上へ着いたが天氣が惡いので滯在してゐると、冠さんと小西民治氏が登つて來られた。天氣がよくないのと、已に八月に入つて一般の登山期が過ぎてゐるせいで、毎日の登山者の數が百名を出ない樣子である。白馬の小屋は兩方共昨年から村營になつたさうだが、お城のやうな大建築を二ケ所者持つていさゝか持て餘してゐる樣子だ。その無理な經營費を登山者に負擔させやうとする考へだつたら登山者こそ迷惑する譯である。大いに考へるべきであらう。

八日、朝は九時頃から晴れて來たので大池へ出掛けたり樂しい一日を過す事が出來た。九日朝柳又の水源へ下つて天幕を張つたが、天氣が又惡くなつたので五日間張つたまゝで附近の數多いお花畑を遊び廻つた。霧の中のお花畑は無限の大きさに見

第九十六小回集會通知

今春渡米の機に小閑を得て、**カナダ**の山に惶だしい登山をされた本會會員西堀榮三郎氏を迎へて小集會を開催します。多數の御來會を希望致します。

時日　十月十日　木曜午後六時半

場所　日本商工倶樂部、高島屋横

演題　**カナダの山**　**警見**

尙美しい天然色の幻燈數十枚を映寫します。

目次

・朝日岳登山道の荒廢……塚本繁松…一
・夏山だより……中村謙…二
・山の名、山の地名(四)……白馬耕…四
・夏の山旅から……盛岡英治郎…四
・K2・一九三九年(二)……吉澤一郎…六
◇山岳部欄……七
◇圖書紹介……八
◇會員通信、會務報告……九

えて、その美しさは一層増すやうに思はれる。

十二日に久し振りで本當に美しい青空が見えて來たので天氣の定まつた事を確信し、十三日朝、朝日岳へ向つて出發した。所で驚いたのは、雪倉、朝日岳を經て北又谷に下る登山道のはなはだしい荒廢振りであつた。登山が益々盛になり登山道も段々よくなつて行く筈の今の世の中に、此處ばかりは全く廢絶して、後數年もたてば恐らく跡形もなくなるであらうといふ奇現象だ。鉢ケ岳迄はそれでもまだかすかな踏跡は分るが、雪倉岳へかゝるともう全く踏跡といふものも見當らない。積石も已に倒れ或は風化の爲にくづれて、それをたづねて行くさへ困難だ。雪倉の先の岩壁を避けて越後側を卷いて赤男山の鞍部に達する道などは、初めて行く人には全く見出す餘地はないであらうと思はれる。朝日岳への登り口附近はすつかり山竹が生へてそれを分けて行くのは一苦勞だ。私共は日暮れた森林を拔けて、幸にも昇つた月光の中を草付の中に道なき道をたづねて、朝日岳の頂上に着いたのは八時半であつた。頂上から夕日ケ原迄の間は道の形はある。イブリ平のとつつきは以前よりは却つて分りよくなつてゐる。しかし夕日ケ原から下の藪の中の道はすつかり雜木、竹、草が生え繁つて歩くのは容易ではなくなつた。何にしてもイブリ平に小屋がなくなつたといふ事、これはこの道を通る人をあく迄制限する。即ち小川と白馬岳との間、どうしても此處で一泊の必要があるからである。この道を作つたのは昭和三年で、今年は十二年目にあたるのだが其間殆んど修理をしてゐないのだから廢絶するのも無理がない。この道は山麓山崎村にある大蓮華山保勝會で作つたのだが、元々私は此處に道を作る事は賛成でなかつた。朝日岳ぐらひは山深き道なき山として殘して置きたかつたのである。しかしその翌昭和四年には蓮華温泉から朝日岳迄營林署の林道も出來たのだし、矢張り道の出來るべき時期が來てゐたのだらうが、道を作つた以上、そしてその事が一般登山界にも知れ渡つた以上毎年修理する事は作つた人達の責任と思はれるが、其事なくして今は道は荒廢し小屋はつぶれてしまつた。今後どうなるかは知らないが、私としては再び元の靜かな山にかへつた事を心ひそかに喜んでゐるのである。たゞこの儘では小川からは絶對に一般登山者を登らせてはいけないし、白馬方面からの逆縱走も甚だ危險であるから山に慣れ天幕を所持する人達だけの通つていい道とならう。

私共は十四日夕刻北又谷に下り、その悠々たる流れを見て今更なつかしさにむせび泣きたい程であつた。この流も近くなくなると聞いてはそれが本當かと言ひたくなる。

× × ×

夏山だより

中村　謙

例によつて例の如く色々な關係であちらこちらの山へ行つて來ましたので、見聞したことの數々を認めて何等かの御參考に供し度いと思ひます。

尾瀬から日光へ

（七月廿二日—廿六日）

今年は季節が多少おくれたせいか菖蒲平のキンコウカは未だ咲き出したばかりで期待を裏切られましたが、その代りに、日光キスゲは早過ざもせず遲過ぎもせぬ滿開で、實に素晴らしい景觀でした。殊に長藏小屋から沼田街道に沿うた大江濕原は全く花で埋れて唯々感嘆之を久くするのみでした。

長藏小屋の主、長英君は既に御承知とは存じますが、七月十六日に應召狀を受取り十九日午前一時、折から宿泊の十數名のお客さんに送られて勇躍北海道の聯隊に入隊せる由。後に殘されたお神さんは、よそ目に見るも氣の毒なほど、乳のみ兒を背負ひ乍ら、かひ〳〵しく働いて居りました。

十年振りで鬼怒沼林道を通りましたが、鬼怒沼から八丁ノ湯への新道は其筋の注意があつたとかで、今は通らぬことになつて居ます。また日光澤温泉と八丁ノ湯の間に加仁温泉といふのが出來、更に手白澤に手白澤温泉といふのが出來ました。後者は山中到る處にその廣告がしてありました。

奥利根の山々

（七月廿九日—八月四日）

兼ねてから行つて見たいと思つてゐた水長澤を溯行して平ケ嶽に取付き、二岐澤を下降、再び西ノ澤を溯つて大水上山に登り、兎、中ノ嶽、駒を經て水無川に降りました。

最近は西仙コイデを徒渉せず、湯ノ花温泉のところで籠渡しで對岸へうつるやうになつてゐます。赤倉澤出合の小屋はなくなり、その代りに水長澤出合の一寸上に小屋が出來ました。因みに越後澤出合の小屋もなくなつたさうです。

平ケ岳へ登るには水長澤小屋の少許上流のところから水長澤の尾根に取付いて尾根通しに沖の追落附近までゆき、それから一時間ほども藪漕ぎをするのが最も捷徑ださうです。といふのは一七四三米獨標の東南に最近鑛區がかけられた爲め沖の追落附近までは徑が通じたからです。尚ほ本年の八月上旬には水長澤の右岸をまいて新たに小徑が造られる由、若しこれが出來上れば水長澤の奥へ行くにも至極簡單になるわけです。

二岐澤では檜枝岐小屋がガツチリ造り直されました。タモギ野地の小屋の他に左岸にもう一つ小屋があります。

二股出合の小屋は遂に荒廢してなくなつてしまひました。その代り一寸上流に新らしく小さいのが出來ました。灰ノ又澤出合の小屋は依然として健在ですが、大澤の小屋はなく、西ノ澤の小屋は大分いたみかけました。

西の澤は新らしい地圖の通り記號尾根を越えた附近まで微かな徑があります。それから割合に溯行し易く上部の惡いところはスツカリ殘雪に埋れて居りました。

平ケ岳の頂上にも大水上山の頂上

にも懐しい名刷入れのピンが健在して居りました。久し振りで親友に逢ふ心地して大變うれしく感じました。最近水戸高校の奥利根に於ける活躍は實に華々しいものがあります。

中ノ岳の小屋には初めて泊つて見ましたが却々感じがよかつたです。天狗平の小屋はもう使用に堪えません。モチガハナ出合にはゼンマイ取りの小屋が二、三軒ありますから何時でも利用が出來ます。出合から下流は右岸沿ひに樂に歩ける道が出來てゐます。殊にオツルミズから先きは林道が完全してゐますから夜でも大丈夫でせう。

「山岳」第三十五年 第二號豫告

内蒙古の調査旅行　京大旅行部
千丈澤を繞る山々　法政大學山岳部
積雪期の鴨緑江源流大阪商大山岳部
ミニヤ・ゴンカ山群　望月　達夫
三月の北ノ又　田中　實
白馬三山とその以北　盛岡英治郎
春の白馬頂上より糸魚川へ　同　人
高所に於ける總代謝　額田　敏
行爲と冒險　伊藤秀五郎
物故會員追悼記
會務報告其他　總紙數約二百三十頁

大體右の内容をもつて十一月中には刊行の豫定ですが、印刷所の手不足、用紙入手難等の事情に依り幾分遲延するかもしれませんから、その點はお含み下さい。尚明年度への寄稿を待望してゐます。　編輯係

燕・常念・神河内

（八月六日—十日）

十何年振りでアルプス銀座へ行つて見ましたが、道路のよくなつたのには一驚いたしました。只今は信濃坂下までしかバスは通ひませんが、目下工事中ですから近い中に中房温泉まで乘り込めると思ひます。

常念から蝶ケ岳、大瀧山への一日は幸運にもスツカリ晴れて思ふ存分槍と穂高の展望を恣にすることが出來ました。世間では大瀧山がいゝと云ひますが、私は蝶の印象が一番よいと思ひました。今年は槍の雪渓がなくなつて土膚をむき出してゐるのには、遠目乍らも聊か悲觀いたしました。

那須から東北の旅

（八月十五日—廿二日）

那須から山越をして甲子温泉に辿りつき、大白森、小白森を越えて二股温泉から湯野上温泉へ。山都から飯豐山に登つて玉川口へ。峠から姥湯を經て吾妻連峰を東大巓から西大巓に縱走、檜原湖を傳つて磐梯公園に到り、磐梯山に登つて猪苗代湖への八日間の旅です。

甲子から二股への山越えはあまり通る人が無い爲めに物靜かなものでした。でも林道はしつかりしてゐますから山慣れた人なら、大いした苦勞はありません。二股の温泉は先年の大嵐で流失したのですが、再び出來上つてこの春から營業をしてゐます。二股から雜根に通ずる途中に横はる上野原はのんびりしてゐて却々氣持のよいところです。

飯豐山は兼ねゞ〳〵登りたいと念願し乍ら漸くの思ひで登つて見ました。二千米の山としては却々立派なもので、頂上附近は全くアルペン的風景でした。八月の末も近いと云ふのに殘雪の豐富なこと！　あれで高山植物の盛りの七月中はどんなかと思ひました。「山日記」にも書いてあるから御承知とは存じますが、飯豐山の山都口には實に澤山の山小屋が有りますが、いづれも八月中で取りこはさるゝもので、時期以外の登山に使用の出來るものは奥ノ院の小屋のみです。

元小玉川温泉と稱した飯豐温泉を訪づれて見ました。これも七月中旬から十月一杯の小屋掛けで、二軒有り、舊盆と越後の盆とが一緒になつたとかで超滿員の盛況でした。小さな二つの小屋に四百人の浴客とは實に驚いたものです。芋を洗ふとは全くこのことでせう。長者原からはハイヤーかトラックを利用することが出來ます。

峠驛から一里で滑川温泉、それから更に一里で姥湯です。滑川までは婦女子にも容易な山道ですが、姥湯までは稍々急になります。東大巓に取付くには滑川から直接登つた方がよささうです。姥湯からの道はスツカリ藪になつゐて通れませんから。

でも藥師森（俗稱賽ノ河原）の展望は洵に素晴らしいものがありました。

彌兵衛平は苗場を想ひ出させるやうな濕原で何んとも云へない程いゝ氣持でした。尾根筋には大體指導標が完備してゐます。開くならく白布高湯から人形石、東大巓を經て家形、五色沼、一切經、沼尻へのコースはしつかりした道が通じてゐる由。天狗岩のところにある吾妻小舍は大分破損しかけてゐました。

西大巓から早稻澤へ降りましたが藪がひどくて閉口いたしました。あとできくと頂上から小野川への道が通じてゐる由、これは通り易いとのことです。

磐梯山から押立温泉を經て翁島への道は時々軍隊の射撃があるので通れないことが有りますから、その積りで計畫する必要があります。

八ケ岳高原

（八月廿六日—廿八日）

最後に青年團のキャンプ指導で八ケ岳高原へ行つて參りました。松原湖から稻子牧場まで登つて幕營し、硫黄岳へ攀ぢて歸つて來たのですが、赤岳小屋が非常にボルといふので不評判でした。稻子牧場には二百頭ばかりの牛馬が放牧され、小屋の清水は相變らず滾々と流れて盡きるべくもありませんでした。

……

カット……前頁の新らしいカットは川喜田壯太郎氏作。題「植物」。

× × ×

會費納入について 再度のお願ひ

先月の會報に、養金缺乏の爲に會計では相當困つて來た事を訴へて會費未納の方は至急御送金方を願ひました所、續々と御送金を賜り會計係は大いに感激致しました。早速御送金下さつた方々に此處に改めて厚く御禮申上げます。この分では個別的にお願ひ狀を出さなくて濟むのではないかとさへ思ひますが、まだ〳〵未送金の方も相當の數に上ります。近く「山岳」の發行其他多額の經費の必要に迫られて居りますので、早速御送金を願はないと矢張一人々々お願ひせねばならぬ事になりませう。

未だお拂込なき方に重ねてお願ひ申上げます。どうぞ會計の苦衷をお察し下さいまして、會報に挿入の振替貯金用紙を御利用の上至急御送金の程切にお願ひ申上げる次第であります。（會計係）

會員名簿作成について

近く會員名簿を新しく作りますが、轉居通知をまだお出しにならない方、最近住所の變つた方、代表者の變つた會等其の他お氣付の點は至急御通知下さい。　（係）

★

山の名、山の地名（四）

白馬　耕

び當山）の形から歸納して、一つの峰ではあるが、其頂きが、孤立にならない程度の數峰に分立してゐる、言はゞ何處をその頂點とも指示し難いやうな、さうして他に目に訴へる色なり、頭に訴へる性質なりに特徴のない、……山に蓮華の名を與へたのでないであらうか。即ち其外形に蓮華の名を生む理由が存在してゐるのではなからうか」（日本アルプス縱斷記）。

十四、白馬岳　標高二九三三、一

「昔時、大蓮華。八十八夜の頃、田の代を耗す如き馬の形が黑く現はれる。故にシロウマ（代馬）といふ」六ノ三、蝶郎氏。

「山の名稱については、暮春殘雪白馬の天に沖する狀をなす故に名づくといふのが普通の解のやうであるが、白馬（はくば）ではなく却て雪の消えた跡が爺ケ岳の種蒔爺のやうに耗し馬の形になるのだといふ、丁度それが八十八夜の頃から見えるので、里人に對して爺ケ岳が種蒔を促すやうに、田の代搔の季節を示すので代馬（しろうま）であるといふ、それ故に白馬を音讀するのは山の名稱の三度目の變化である」松本と安曇一二〇頁。

「三州測量圖籍が大蓮花と云ふ名稱を重視して採用した事は其頃すでに奥山廻役や地方人に依つて實際的に使用せられて居たと見るべきである。文政以後は蓮花山として通用語となつて居る……この蓮花山が後年に至るに從つて、三國の境と云ふ觀

十二、針ノ木岳　後立山々脈　標高二八二〇、六

「本山は從來定まれる名稱無く、兵三郎等も確かなる山名を知らず、强ひて尋ぬれば、マヤクボの頭なりなど答ふれども、それすら左程普通ならぬものゝ如し、……自分等は本山のみに針木岳なる名稱を與へたり……頂上を辭す、三角櫓の柱にハンノキ岳と記せる木板を釘付にし置きたり」（山岳六ノ一）。

又「ハリノキ峠、ハンノキ（古名ハリノキ）峠より來らんか」（五ノ一、笹魚生）。

十三、蓮華岳「針ノ木」　標高二七九八、七

「大町の人より蓮華岳を白蓮華（ビヤクレンゲ）とも呼ぶことあるを聞けり」六ノ一。

「この三つの蓮華（筆者註、白馬の大蓮華、信越飛國境の三俣蓮華及

夏の山旅から

盛岡英治郎

いつも山行をともにしてゐた丸山與兵衛が、このほど召集解除になつて元氣に歸村したことを聞いたので、とに角と八月十六日朝八時に新宿を發つた。信濃大町へ著いたが、舊態依然として北行の連絡が惡い。バスですら二時間近くも待たねばならないのに驚いたが、折よく白馬への登山者が五人ゐたので、二股へ向けて相乘りタクシーを飛ばした。途中、木崎湖には避暑客がかなり澤山ゐてゴチャついてゐた。細野へは夕方にならないうちに著いた。夜は彼と歡談した。

翌朝は六時に起きて村中をあちこちと歩いた。秋の七草が朝露に輝いてゐて美しい。そこら中が綠の氾濫で人間が植物共に壓倒されそうだ。殊に玉蜀黍と夕顔は全く逞しい生長振りを示してゐる。この日は終日のんびりと暮した。午後になつて遠見尾根から夕立がやつてきた。

十八日、朝細野を發つて白馬岳へ向つた。途中猿倉、白馬尻と彼の歸還挨拶をしながら一休みをしたが、どの小屋も歡迎をしてくれて、私もその余惠に與つた。頂上では白馬山莊が昨日で閉めてしまつたので、村營小屋へ泊つた。十九日は白馬大池へ向つた。池の近くまできた時に、今日まで大池小屋の番をしてゐた丸山三郎が、小屋を閉めて引き上げてくるのに出會つたが、これは殘念なことであつた。大池から「天狗のお庭」を通つて蓮華溫泉へ下つた。溫泉へ近づいてから二十分ばかり夕立にたゝかれてビショ濡れになつたが、すぐ湯につかつて快くなつた。今は蠶の暇な時とみえて、越後の衆が多數湯治にきてゐて小屋は超滿員だつたが、登山者のために六疊の室を一間あけてあつたので助かつた。こゝの湯治客は何だか病人くさくみえた。二十日は木地屋、大所を經て平岩へ下り、バスに乘つて川尻まで行き、こゝから小谷溫泉へ歩きはじめた。道は中谷川に沿つてダラ〳〵登りになつてゐる、かなり暑い。歩くのが嫌になつてきたので、道ばたへ荷を下して一休みしてゐると、下の方から荷馬車がやつてきた。馬子さんに交渉した末、主任さん（警官）がきたら下りるとの條件づきで乘つけてもらふ。馬子さんも車の上から手綱をとつてゐる、空荷（カヤ）なので馬も樂さうにポク〳〵と歩いて行く。道ばたの草叢を見附ると鼻をならして草を食んでゐる、よく見るとクローバだ。馬子さんに聞くと馬はクローバが大好きださうだ。私は馬に向つて『四ツ葉のクローバはホロ苦（ニガ）いかね』と聞いてみたかつた。草を食んで咽喉がかはくと、道ばたの流れに首を突込んで甘さうに飲んでゐる。やがて荷を積むべき所へきたので、この長閑な心愉しい荷馬車と別れた。夕立のきさうな蒸し暑さの中を歩いたが、溫泉へつく二キロばかり手前から降つてきた。汗ばんだ身體には反つて快かつた。それも間もなく晴れて、中谷川の谷に殆ど圓周に近い虹が美しくたつた。溫泉へつき元湯へ行つた。丁度十年前にこゝへ來たが、宿屋の主人はそのことを覺えてゐてくれた。表に面した八疊のいゝ部屋を二人で占領する。こゝも越後の衆が隨分大勢きてゐた、信州の連中もその中にまじつて少しはゐた。しかしこゝは宿屋が四軒あつて、どれもが大きいから蓮華溫泉ほどの超滿員ぶりはみせてゐなかつた。そして我々の室はこの雜沓とは直接關係のないよい位置だつた。たゞ風呂がかなりこんでゐたが、瀧になつて落ちてゐる湯はドン〳〵流れるし、こうした地方の人々の會話を非人情に聞いてゐるのもよいものである。ついた翌晩に盆踊りがはじまつた。盆踊りは、見たいと思つてゐたが、まだ一度もみたことがなく映畫のまやかしものや、人の書いたものによつてその有樣を想像してゐただけであつた。それがゆくりなくも今度は本物を見ることが出來た。

やうやく暮れきつた七時ごろに、

念と共に實際の三國の境、上駒ケ嶽に結び付いて大蓮花卽白馬とまで進展したのではないか。又奥山廻りの登山も同樣藩政末期には、上駒ケ嶽卽大蓮花（卽白馬）といふ樣になつて居たと思ふ節々がある……」山岳卅二ノ一、中島氏。文政四年七月に石黑信由翁が立山頂上から各峰の方位を決定せられた。その際の繪圖が、この三州測量圖籍といふ貴重なものである。

白馬岳が越中、信州各側からの呼稱がそれぞれ異つたのも、上述の記錄などから大體窺ふことができる。越中側からはその形が蓮花を想起させ、信州側ではその殘雪型によつて農事との交渉があり且つ各々山名由來の因をなしてゐるのは、注意したい事柄である。併しこれらは代馬の出る場所の明記がないので、最近の記錄を一つあげると、

「此の馬の現はれる場所は白馬連嶺中の大日岳（地圖の小蓮華山二七六八、八米）の東北端の東南面で、北城村の平原部からは何處からでも仰ぎ見る事が出來る。寫眞で見る通り（筆者註、別に寫眞掲載）白馬でなく黑馬であるのは皮肉である。……その西山に代馬が現はれるから、何時からか其の最高峰が代馬岳となり更に白馬岳となり、之をハクバと呼ぶ人も出て來たものと思はれる……」（「山」二ノ六、田邊氏）。

十五、ニシダケ（北安曇郡北城村での呼稱）

「北城村の西方に嶮峻たる連峰は所謂北日本アルプスの重鎭で、山麓の住民は西岳（ニシダケ）又は單に岳（タケ）と呼んでゐる。その連峰中の鏡ケ岳と大日岳とには大日如來の石像が安置されてゐる……」（小谷口碑集）。しかし之は後立山々脈のどの邊までを指すのかはつきりしない。

十六、五龍岳　同山脈　標高二八一四、一

「近頃、鹿島槍北方のゴリウ岳（北城村でいふ割菱岳）を後立山と書き、後立をゴリウと音讀すること大分流行の樣子なるが、ウシロタテヤマと云ふ總括的の大名を何故、……比較的低小なる此峰に與ふことゝなりしか、甚だ怪しむべし、……亦た五龍の二字は元と三技が與へたる宛字なれども……」（山岳六ノ一、辻本、中村、三技三氏記事）

或は、鵜殿氏が大正元年白馬登山の際、案内丸山俊雄その他より聽取つた呼名として、ワリビシがある、卽ち「あの山はもと此地方の人は、ワリビシ岳と云ふてゐたが、近來ではゴリウと稱ふ人もある……」と。……「で、私はゴリウ岳と稱するよりも、……割菱岳又は惡菱と稱しておきたい」（八ノ二、一七八—一八一頁）。且つ、當地方には天狗ビシ、小僧ビシなどあり、ヒシは主に斷崖の場所に用ふとある。

他に、ヒシは岩石の絕壁（六ノ三）、越中祖母谷川にて溪流にのぞむ懸崖

元湯の前庭に十數人の信州の連中（南小谷村）が集り、やがてやり出した。環になつて躍り、別に音頭取りはまん中にゐるのではなく、環の中の人が歌つてゐる。それでもやはり同じ一人の人が歌つてゐるらしかつた。踊りの調子はかなり速く、文句は安曇節のそれと同じもので、次から次へと文句が移つて行つた。テンポの遲いせいか、想像してゐた盆踊りと大分異なつてゐて期待外れがしたが、見物連中も『信州の人は氣が短かいから、同じ文句を二度歌はない。』などと云つてゐた。半時間餘りたつて止めてしまつた。仕方がないので入浴でもしようと新湯の方へ手拭をもつて出かけた。新湯の前の庭で越後の衆の踊りがはじまりかけてゐた。風呂からあがると大分盛んになつてゐた。濡れた手拭をもつて見物する。三十人ほどの人が環になり、まん中に小さい太鼓を持つた拍子取りがゐて環の中の一人が音頭をとつてゐる。ちようど宿屋の前庭なので中の電燈で適當な明るさに照らされて、よい雰圍氣をなしてゐる。聞いてゐると同じ文句ばかり歌つてゐるので、そばの人に聞いてみると『歌が三つで夜が明けると云ひますでな』と笑つてゐた。だん〳〵環の中の人がふえてきた。はじめは男ばかりだつたが女もはいり、腰が曲りかけてゐるおばあさんもはいつて踊りはじめた。一人、二人は男の變裝した女もゐる。歌も踊もテンポのゆるやかなもので、いつの間にか音頭とりがまん中へ出てきて立つて歌つてゐる。人がふえてきたので環が二重になつた。內側の環は太鼓を中心にしてほゞ圓周に近いものを作り。外側のそれは地面の關係で楕圓周をなし、その長軸立の兩焦點と思はれる位置のあたりに、內側の圓周がある。いよ〳〵盛んになつてきて環の中は嬉しさうに踊つてゐるし、見物の人達も愉しさうに見てゐる。みんなが浮世の苦勞を忘れたやうな顏付きをしてゐる。見疲れたので部屋へ歸つた。蒲團の中へはいつたが今度は佐渡おけさが聞える。また起き上つて見に出る。太鼓も環の位置も同じだが、音頭取りがまん中にゐなくて環の中の人が、かはりばんこにあちこちから踊りながら歌ふ。そして他のものがそのリフレインを歌ふ。それが中々うまく行く、たまに二人が同時に歌つてもどちらか一人だけが歌ひ止めて、他の一人が歌ひ續けてゐる。この踊りもテンポはそんなに速くない。見てゐるうちに手振り足振りを覺えようとしたが、それでは何だか見物の面白さが減じるやうに思つたので、非人情に見つゞけることにした。十一時近くなつたので部屋へ引上げたが、踊りはまだ續いてゐる、離れて聞くと波のやうに思へる。この人工波の音を聞きながら眠りに就いた。

湯に入つたりなどしてのんびりと四日間を送つて二十五日歸京した。

會報百號に就いて

この會報も來る十二月で第百號を數へることゝなりました。そこで十二月號は何んとか物資不足の現狀を克服し、增大號を出したいと思つてをります。つきましては全員諸氏より特に澤山の御寄稿を願はなければなりません。殊に古い會員の方々、曾て本會報の編輯にたづさはられた方々には是非何か書いて戴きたいと思つてをります。紙の入手の都合でどんな體裁となるか今の處はつきり申上げられませんが、出來るならば少しでもアート紙を使つて寫眞を入れたいと考へてをります。

百號（十二月號）原稿締切は十月末日

尙五十一號から百號迄の製本も明年早々には可能と思はれますので、索引も銳意作成準備中であります。

（編輯係）

圖書室開室時間

月 水 金　午後六時—九時
火 木 土　午後一時—五時
日曜、祭日、第二木曜日閉室

「山岳」製本の御引受

「山岳」第三十四年の製本を御引受け致します。製本料は壹圓五拾錢ですが荷造り送料共左の樣になります。

東京市內　壹圓七拾五錢
其他の地方　壹圓九拾參錢

（七ノ一）、稜角ある岩壁、例へば八方の黒ビシ（小谷口碑集）などの實例があるから、この割菱岳のヒシが岩崖を現はすことは明らかである。尙、鋭い岩壁をヒシといふ例は、越後岩船郡などにもある。

そこでワリ（割）菱かワル（惡）菱かといふことであるが、山容から見ても割菱が適切であるが、時に行動の實感から惡菱とも唱へたかつたらうと思ふ。永くその山麓に在つてこの山と交渉の深かつた土地の人々から呼び慣らされてゐた割菱といふ人間の手垢のついた呼稱が、五龍といふ飛躍的な名稱に變つてきたのも亦當然の推移と思はれる。唯、ワリビシといふ呼名が永い間、一部の人人に心から親しまれてゐた小さい歴史といふものは、吾々にもなつかしまれてよい。

上述「三州測量圖籍」には、餓鬼ケ岳がこの山に認められ、嘉永五年の「新川郡海岸分間繪圖」にも同じく同號が記されてをり、中島氏は之が後の五龍岳なることを推定してをられる。（冊二ノ一）。

十七、遠見山　五龍岳東南方

大正元年測圖五萬分ノ一の「大町」によると、まだ遠見山（二〇〇七）だけの記入しかない。しかも、この標高をもつた突起が大遠見、この東北方にあたる直下の一つの瘤が小遠見であると、神城村飯田の人夫が言つてゐた（大正十四年當時）。處が、その後の同圖幅昭和五年及六年修正圖版には、二〇〇七米の方が小遠見山、之より五龍岳に近い同じ尾根の突起二一〇六、三米の方が大遠見山となつてゐる。そこでこの「遠見」の解釋であるが、この稜線は比較的緩やかな起伏をもち、いくつものタワミができてゐる。「遠見」はこのタワミ又はタルミへの宛字と思ふ。勿論、之は地方語に主きをいた私だけの推測に過ぎない。この突起から五龍より八ツ峰へかけての眺めも中々素晴らしい。確かにこの「遠見」といふ小展望臺の意味を現はす文字は宛字として適切であらう。云ふ迄もなく、こゝのタワミ、タルミは嚴密な意味での鞍部、乘越ではないが、一つの尾根における幾つものタワミといふ意味から、それぞれ大きいタワミの所の突起を大タワミ（大タルミ、大トーミ）、小さい方のを小タワミ（小タルミ、小トーミ）と呼んだものと思ふ。この推測が幸ひ當つてをれば、矢張り「遠見」といふ文字が極められる前、永い間に亘つて、土地の人々の文化史とは切り離すことの出來なかつた深い因緣が、この一つの呼稱の發生においても見出される。兎に角、地圖にこの文字が記入せられるに到つた當時の事情を知り度いものである。

〔〕〔〕〔〕〔〕〔〕〔〕〔〕〔〕〔〕〔〕

K2：1939年

…（2）…

吉澤一郎

十八日にC4へ着いたキクリはテンドラップとキタールがそこにゐたので補給品を持つて直にC8へ登るやうに命じ、かつC6にゐるビンスーとツエリンの二人にはC6とC7の聯絡をするやうにと頼んで置いた。次の日テンドラップとキタールはC6に登り、翌日ビンスーを連れてC7へ行き、その日の夕方C8への途中まで登つて行つて合圖したが何の返事もないので、前進隊は三人共遭難したものと決めてしまつた。

テンドラップはビンスーとキタールを連れてB・Cに戻つた時、彼は前進隊の全部が行方不明になつた旨を報告したのである。

七月二十五日　クロムウエルとトレンチが二十二人の擔夫を連れてアスコーレに引揚げた後で、ディユランスはビンスーとキタールを連れてウオルフを助け下ろすためC7に向つた。ウィースナーとラマと他のシエルパ達は二日後に再び山頂攻擊をなすため出發する事になつてゐた。

二十七日C4にゐたディユランスとダワは病氣になつたのでB・Cに戻り、キタールとビンスーは吹雪を衝いてC6に達し他の隊の來るのを待つた。

かくして遠征隊の調子は次第に惡化して行つた。ウィースナーもラマも調子が惡い。天候も惡くなる一方であつた。山頂攻擊の再擧は放棄された。しかしウオルフはまだC7にゐる、それを助け下ろさなければならないのだ。

そこへキクリは、自分とツエリンと二人ならば一日でC7へ行き、次の日ビンスーとキタールを連れてC7に登り、その日の中にウオルフを下ろして來て見せると申出て來た。

この申出は最良の解決策として承認された。二十八日の朝、日の出と共にバサンとツエリンはB・Cを後にした。天氣はよくなつた。二十九日の朝、本部で强力な望遠鏡を以て上方の樣子をのぞいてゐると、三人の男がC6からC7へ攀ぢて行く姿がうつつた。キクリは己れの言葉を實行したのだ、實に驚歎すべきその登攀能力！　その日の午後遲くなつてたゞの三人だけがC7からC6へ下る姿が見られた、變事の印の火の合圖はない。

七月三十日　は午後遲くまで蟄つてゐてB・CからはC6とC7との間の行動を觀察する事が出來なかつた。三十一日には霧が出てゐてB・Cからの注視をさまたげたが時々C6のテントが見えた、しかし火の相圖はまだなかつた。

八月一日　は再び天氣が回復し、C6とC7との間のルートが見えたが何事もなかつた。八月二日の朝、C6のテント附近を動く人影があると思つたらC5とC6との間にある雪の斜面に新しい踏跡が印せられたのを見た。しかしC6は依然として立つてゐる。午後一時、ツエリンがつひにB・Cに着き上方の報告をもたらして來たのである。

ウオルフは衰弱し切つてゐたのだ、食物は數日間何も攝らずテントの外へは一度も出たことがない。それにストーヴを燃やしつけるマツチが一本もなかつた。キクリ等の言葉にも拘らず彼はつひに下りる元氣も出なかつた。二十九日一度C6に下つたキクリ達は三十日は吹雪で行動も出來ず、三十一日いくらかましの荒天を冒してC7に向つた。ツエリンは如何なる場合にも必ず午後には戻るといひ殘して行つたのである。しかしその日も次の日も四人は愚かに三人だけも戻つて來なかつた。何か起きた、とさう確信したツエリンは八月二日の朝になつてB・Cへの下山を決意したのである。

かくてB・Cにおける一同は出來得る限りの方策を講じたが得る所は

なかつた。C2へ登つたツェリンは比較的手近にあるC6へ向つて大聲で叫んで見たが何の應答もなかつた。救援隊の不安はいよ〳〵増大する。以來天候は惡化の一途をたどり、氣温はずつと下つて新雪は陽が出ても融けなくなつた。もう冬の季節がやつて來たのだ。行方不明の四人は八月九日以來食糧もなしにC7にゐる筈だ。その十日のうち半分は吹雪であつた。最早その生存は勿論、死體の引卸しさへもが不可能になつてしまつたのである。B・Cでも食糧と燃料の不足を告げて來た。かくして一行は涙を呑み山の上方にゐる友や勇敢なシェルパ達の冥福を祈りつゝつひに根據地を後にすることになつた。

以上を以て甚だ簡單ではあるが彼等の行動、遭難の顚末を一應述べた。最後に私はウィースナーがその手記に添えてヴィットリオ・セラに送つた書翰を御紹介して本稿を終る。

親愛なるセラ殿

私はこゝに我々の遠征に關する報告を同封致しました。

我々が我々の良友ウォルフと三人の優秀なシェルパ達を失つたことは返す〴〵も殘念であります。一擔夫の過誤により四人までもの貴い生命を失ふに至りましたことはあまりにも殘酷であります。若しこの擔夫テンドラップがあゝした嘘言を吐かなかつたならば、今回の遠征の結果は如何に異なつたものになつてゐた事でありませう。若し彼とキタール（キタールは立派な人間でありましたがテンドラップには頭が上りませんでした）が他の者に我々が墜落して行方不明になつたなどゝいふ僞りをいはなかつたならば、C6から以下のテントは取外されなかつたでありませうし、またその後の惡天候が襲つて來る前に頂上に達し、無事に確實に戻つて來ることも出來たかも知れません。

テンドラップがどういふ積りで我々が死んだなどゝいふことをいひふらしたか、これは諒解に苦しむ所であります。それにまた七月十七日に、彼はC8に二つの荷を背負つてバサン・キタールと共に登つて來ることになつてゐたにも拘らず、C7から下つてしまひました。十四日に我々と別れてC8から下る時には嚴然と次の行動を約束して行つたのであります。C7からC8へのルートには困難な所はありませんでした。そしてテンドラップの技術的經驗からすれば、しかも剛毅なバサン・キタールを伴つてゐる以上、あの位な道には何等の危險も困難もなかつた筈であります。あの遠征の間において我々は常に豫測し得ない場面にぶつかりはしないかといふことをば考へてはゐましたが、私は決して、退却の場合のための補給品糧食までをも持つて行かれてしまふなどゝは全く想像も出來ないことでありました。

K2に關しては、私はそれが征服し得るものであるといふ事實を確かめ得たと思ひます。我々は岩峰の上の點、即ち絶頂から下りてゐる南東稜上の氷壁の末端にまで達しました。その上ではもう稜も消え、雪の緩斜面が東方から最高點の方へひろがつてゐるばかりであります。若し氷壁のコンディションさへよかつたならば、我々が第二回目に選んだルートこそ最も容易なものでありませう。

最後の頂上部の南東稜上にある一點（約二七、〇〇〇呎）からは北東稜の前面をはつきりと見る事が出來ました。この稜にはほとんどルートは見出せないやうであります。同時にまたそこから見た西稜の方も全く近寄り難いものではないかと思ひました。

私は現在ナポリ、ゼノア及びマルセーユを經てニューヨークに向ひつゝあります。第二次世界戰爭の勃發以來澤山の船が就航不能となり、ニューヨーク行の乘船券を入手するのに非常な困難を經驗致しました。

私はもう一度貴下の御親切と有益な御教示と、かつまたすぐれた御寫眞とに對し厚くお禮申上げます。我々もまた色々面白い寫眞をとりましたのでそれ等はいづれニューヨークからお送り致しませう。若しこの恐るべき戰爭が直ぐにでも終るならば私は再び、我々の最優秀の登攀者二三人と共に、またバサン・ラマやその他の立派なシェルパを伴つてK2に歸つて行くことが出來ることゝ信じて居る次第であります。

末筆ながら御身體專一に

F・H・ウイースナー

（以上）

欄部岳山

東京帝大スキー山岳部

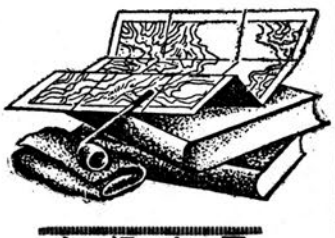
數年前迄我々の登山の最高目標はヒマラヤに置かれて居た。我々學校山岳部はヒマラヤを目指す事に依り總てが結ばれ、統一されて居た。併し狀勢の變化に從つて、我々は此目的を閉されてしまつた。

併し乍らヒマラヤへの道が閉されたとは言へ、我々の登山觀念は最早かつての登頂時代へも、又ヴァリエーション時代へも向ふ事は出來ない。我々は嘗ての總ての登山段階を、總て直接實踐した譯ではないけれども、我々は觀念の中に於て、此等の段階を通り過ぎてしまつた。此處に學校山岳部としての我々の混亂が始つて居る。

我々は必然的にその團結を失ひ、山岳部に依る登山と個人的登山との區別を見分る事は出來なくなつて來た。我々が再び山岳部としての行動に活路を見出す爲には、過去に於てヒマラヤを目指す事に依つて部の團結意識が必然的に生じて來た事に對して、山岳部生活を達成するが爲に登山する、と云ふ方向に目的の轉倒を行はねばならない。そしてかゝる目的轉換を餘儀なくせられて居る東大山岳部として、此の夏行つた涸澤合宿も當然この線にそつて居る。

我々にとつてあまりに知り過ぎたと考へられる涸澤に入る事に依り、再び山を全體として眺め、部員相互の鎖を固くせんとする事が合宿の目的であつた。そしてこの目的の爲の手段として、我々は登山技術の再訓練を行はんとした。我々の合宿はこの目的を決して十分に達成し得たとは言へぬ。併し今後更に、冬、春の山を經るに從つて、限りなき山への愛と部員團結を結ぶべく我々は向はうと考へて居る。（垣内政彦）

× × × ×



圖書紹介

Geographical Journal

June 1940 (VOL. XCV. No. 6)

巻頭には一九三九年に行はれたシプトン等のカラコラム探檢が、十六頁に亘つて述べられてゐる。この探檢の模樣は概略ではあるが、會報九十四號に述べてをいたから、玆には省略したい。挿入された寫眞は皆珍らしいもので、就中ヒスパー・ビイアフォ分水嶺中、一九、四〇〇呎峰から撮影された二葉のパノラマ寫眞は素晴らしいものである。文末に「ヒスパー、ビイアフォ、パンマー近傍地域の地理上の問題がほゞ完全に解決されたと云つても過言ではない」とシプトンも云つてゐる通り、彼の前回のシャクスガム探檢と共に、この行もカラコラム探檢史上輝かしい業績として殘るであらう。

此の他に本文では The Cambridge (Myvatn) Iceland Expedition, 1939 (F. L. M. Dawson) がある。

書評欄に紹介されてゐた書物の中では Wilhelm Filchner の "A Scientist in Tartary: from the Hoang-ho to the Indus" London, 1939. (Translated by E. O. Lorimer) が面白相である。西藏の地圖作成に少なからぬ功獻をしたフィルクナーの中央亞細亞旅行記であるが、内地での入手は難しいであらう。

追悼欄にはウォールター・ウェストン師の追悼文がのせられ、日本の山、日本の友、日本山岳會との交渉のさま等が簡單に述べられてあつた。

July 1940 (VOL. XCVI. No. 1)

アッサムや東南西藏へかけて、他の追隨を許さない活躍を示してゐるキングドン・ワードは、一九三八年に於ける紀行を、"Botanical and Geographical Exploration in the Assam Himalaya" の題下に書いてゐる。踏査した場所は、一九三九年ティルマン等が試登したカントー山群（二三二六〇呎）の南方で、ティルマンの紀行文（會報前號本欄參照）と併讀されゝば面白いことゝ思ふ。

それからヒマラヤン・ジャーナルの編輯者として馴染み深いケニス・メイスン教授（氏は現在王立地學協會の Vice-President の一人でもある）が "Notes on the Northern Sea Route" の一文を草してゐるが、之は吾々に餘り緣もなささうだから省略する。

〜〜〜

アルプス紀行（增訂新版）

チンダル著　矢島祐利譯

岩波文庫　四一三頁

黃金時代の高名な登山家ジョン・チンダルの名著であり、山岳文學の古典として香り高き "Hours of Exercise in the Alps" の全譯である。この種の書物が邦語で讀めることは、兎も角嬉しいことであり、ゆつくり味はつていゝ書物であらう。

欲を云へば、卷末に是非索引を入れてもらひたかつたと思ふ。

東京附近山の旅（新版）

高須茂編著　六六版四百頁

昭和十五年八月　朋文堂發行

本書は、先に同じ發行所から刊行された「東京附近山の旅」正篇續篇を一冊とし、其の後に新設された山小舍、登山路、交通機關等を調査の上、大改訂をほどこしたもので、數多い案内書の内でも全般的に取扱つてゐる點で、利用價値が多いことゝ思ふ。執筆者は廿三名の多きに上り、含まるゝ地域は次の通りである。

丹澤山塊、武相甲國境、秋川流域、奥多摩、道志山塊、房總、奥武藏、奥秩父、日原の山、大菩薩連嶺、八ケ岳、那須鹽原、富士附近、箱根伊豆、上越、上信境、上毛三山、日光、霧ケ峰、南アルプス前衛。

概念圖を澤山入れたことは良い。東京郊外から見たスケッチを見返へしに入れたことは、中々良い思ひ附きであるが、これは木暮理太郎氏が多年苦心されて畫かれたものと大體同じもので、眞似事の感がなくもない。寫眞は概して無難。唯始終取り出して見る書物としては、製本がもつと堅牢なものでありたい。

丹澤の谷歩き（山岳新書1）

坂本光雄編著　菊半截二五〇頁

昭和十五年六月　體育評論社

丹澤の谷筋の登路を集めた案内書で、記述は簡潔であるが、割合良くまとめてある。丹澤の谷のみをとれば、前述の案内書にも勝つてゐる。

内容は丹澤山塊概觀の次に、大山を繞る谷々、中津川上流、東丹澤南面の谿谷、玄倉川、道志川、西丹澤の祕境の順序である。同じく地圖を豐富に入れてあることは親切である。

（以上望月記）

山岳語彙（山岳新書Ⅲ）

岩科小一郎著　體育評論社

編者は「小題」の中に「基礎學も指導者も協力者もない自分が、こうした仕事に當るは不適でありましたが云々」と謙遜して居られるが、よく之だけ蒐めて丹念に記述されたものと感心させられる。特に「登山者のために」と斷つてある處も頷かれる。しかし、岩科氏は民俗學に關心と興味をもたれてゐるが爲めに、大變六つかしいところを却て覘はれたといふ感じがしないでもない。

語彙部の本文菊判半截で僅か百二十頁足らずの範圍で、決して充分な語數と内容を盛ることは、誰が此の種のものを企圖しても、易い仕事ではない。語數が尠ければ、それだけ言葉の選擇標準が六つかしくなつてくる。要するに、今の一般登山者の關心の範圍からは直接必要とされぬ言葉も事實は可なり多いので、登山者のためにと云ふのならば、之又、選擇の標目に多少異つた觀點が求められるか知れぬ。しかし、今の吾々には忘れられ勝ちな山間に起つた生活事象等について、吾々がこの語彙によつて認識を新たにし、この國の山と人々のもつ文化的な接觸面を知ることは望ましい。本文語彙の説明も樂に讀めるやうに書かれてゐる。終りに索引のあるのも親切である。始めに入れてある「採集帖より」四篇の中では鹿狩や柚仕事の採集聞書が面白く、資料としても生きてゐる。しかし、語彙集に之らの項は直接の必要もなささうに思ふから、寧ろこの有益な採集又は聞書の事項を分解して、語彙の部にもつと多くを挿入して欲しかつた。收むる處の語彙の大部分が文獻からの引用である點も少し物足りなく、今後增補の機會あれば、もつと新採集の語を多く附加されること、云ひ換へれば他の採集分野では容易に求められぬといつた山歩きの者の感覺に委された部分、或は收錄語の選擇についての吟味などにつき、希望して止まない。

（高橋文太郎）

會員通信

廣島にて　渡邊公平

遂に内地にかへされました。目下廣島に居ります。その中には西か東へ動くことになりますが、見當がつきません。内地の山の樹の多いのには驚きました。禿山の蒙疆に三年も居たせいでせうか。未だ當分白衣です。御通知まで。草々（八月十九日）

天津にて　吉阪降正

先月の末二週間は滿洲で過し、八月の十日から北京を立つて蒙疆から山西に廻り、運よく匪賊の手をのがれて石家莊から再び北京に戻り、今歸路天津によつた所です。所が着くと早々に〇〇租界のデパートの火事があつて、見物はいゝがこの際惜しい事です。東京へは來月中頃に歸ります。皆さんによろしく。（八月二十八日）

沼田街道　茨木猪之吉

八月二十一日、亡妻の一周忌をすまし、二十五日夜行に飛び乘り、郡山廻り新潟行、會津猪苗代で朝、湖畔をブラついたり、裏磐梯川上溫泉行のバスに乘る。磐梯登山は暑い盛りだつた。小學生の登山や青年團が多かつた。川上溫泉で一泊して、翌日はこの山麓の五色沼や檜原湖を見て午後の汽車で若松へ、乘り換へて柳津驛終點。だら〳〵降つて三階建の月本旅館に投ず、一風呂あびて夕景の眺望は中々良ろしい。

翌日は一番のバスで只見川に沿ふて「宮下」乘り換へ「川上」「只見」、終日バス亦バスでウンザリして「山口」泊り、翌日「内川」までバス、徒歩五里、檜枝岐に向ふ。途中雨にぬれ秋草なびく、荒廢した沼田街道はとても良かつた。眞暗い道を行く村の入口で淋しい電燈の光りを見た時は喜ばしかつた。丸屋旅館につく、七十近いお爺父さんに迎へられ、奥の二階におさまつて、一安心した。五日間滯在して作畫生活に入る。

宿もお客はなく、山家の初秋は頗る落ち付ける。時々玉蜀黍を燒いて貰らつて、カジリ乍ら寫生に行くなんて他では見られぬ圖だ。

前夜泊つた兄弟のお客と宿の爺父さんと四名で、三十日は駒ヶ岳へ登つた。天氣は快晴ではないが靜かで、もう雪も花もなく秋の山頂はものの淋しい。晝飯をとつてから、歸へりは富士見林道の尾根を大津岐峠へと出る。「全くのんびりして愉快ですね……」。話合つていつか峠へ出る。それからブナの森林を降つて麒麟手へ降る。毎日鮨の御馳走と土地の食物は何より有難かつたが、其の夜は特別大きな鮨の鹽燒には驚ろき嬉しかつた。

翌日は沼山峠を越して尾瀬沼長藏小屋に一泊、大夕立あり、ガランとして靜かだつた。木立の間から光る湖面を眺めてゐた。

九月一日は三平峠から大清水へ出、街道をテク〳〵古仲まで下り、バスに乘る。鎌田で突然入りこんで呼びかけられたのは水彩畫家のM君だつた。菅沼、丸沼で描いてゐたとの事、午後三時の汽車で無事歸京。

南支便り　松山武貞

その後取りまぎれて御無沙汰してゐます。お蔭樣にて元氣でヒマラヤならぬ南支で頑張つてゐます。

こちらにも山氣狂が相當に來てゐて、會報を引ぱりだこで讀んでゐます。部隊名が變りましたから宜しくお願ひします。（南支那方面軍〇〇部隊）

會員　高橋鐐三郎氏

高橋鐐三郎氏（會員番號二五三）は、本會々員たる事實に三十餘年、誠に本會とは因緣淺からざるに、今回不慮の災害に因り、本年八月十六日七十一歳の高齡を以て逝去せられたり。

氏は平素身體至つて頑健、又健脚にして、最近迄朝夕二里餘の散歩を缺したる事無く、丘歩き位は致し居られたり。偶々本年七月廿三日、日本橋野村ビル四階の齒科醫に治療に立寄りたる歸途、同ビルを徒歩にて降りたる際、二階より一階への階段にて轉落、直にお茶の水順天堂病院に入院の上百般加療を盡したるも、天命詮方なく、廿五日目の八月十六日午前三時五分永眠せられたり。脊髓骨、肩胛骨、腰骨々折、中樞神經極度の障害の爲め、建全なりし内臓諸器管も爲に其の機能衰弱を來し、遂に肺炎を併發せられたるなり。

氏は日頃、山と書とをことのほか愛せられ、机山と號し居られたりと。

本會は茲に謹みて哀悼の意を表す

會務報告

九月定例理事會報告

九月十九日（木）午後六時半　於虎ノ門本會事務所

出席者　木暮、武田、冠、鳥山、木村、茨木、槇、三田、藤島、黑田、塚本、津田、額田、野口、加藤、西堀、中司、望月

一、社團法人申請報告の件
厚生省、登記所共に内覽ずみにて數日中に正式書類提出の豫定。

一、山岳編輯報告の件
別記の内容にて本年十一月下旬發行豫定。

一、會報編輯報告の件

一、山日記編輯報告の件
豫定通り編輯進行中。

一、學校山岳部懇談會の件
近く委員を設けて詳細決定のこと

一、登山用具資材配給の件
近く厚生省宛正式手續の豫定。

一、谷川岳山小屋の件
建設は明年融雪期に延期したるも詳細は追て調査のこと。

一、登山者段級制の件

一、「高山深谷」刊行の件

一、本會を全國登山團體の統制機關となすの件
原則決定、最近に具體的研究に入ること。

一、入會申込者承認
左の十九氏入會承認さる。
竹内熊彦、竹内米子、小野幸、坂原三四郎、吉岡武治郎、垣内政彦、酒井菊雄、跡部昌三、加計朋吉、井上綱、織内信彦、飯田輝英、麓長、佐々木佐太郎、油井寅太郎、福田源一郎、網藏志朗、當本正義、原蕃

日本アルプス登山案内
（矢澤・河野共著）
九州山岳・第一輯　（朋文堂發行）
女子スキー讀本
（大館高女スキー部編）
以上九册　荒井道太郎氏より寄贈さる。深く謝意を表す。
丹澤の谷歩き　（坂本光雄編）
山岳語彙（岩科小一郎著）
右二册　發行所體育評論社より寄贈
第二回厚生大會々誌
寄贈者　第二回日本厚生大會
東京附近山の旅（新版）高須茂編
寄贈者　高須茂氏

受贈會報部報雜誌

園池製作所體育會山岳部
三角點一號
雁ハイキンググループ　會報
頂山岳會　頂　三ノ六號
福岡山の會　さふり八月號
カメラハイキングクラブ
CHC報三五、三六號
野村山岳會　倭風三號
偃松山岳會　會報八月、九月號
七十七銀行山の會　泉ヶ嶽一號
臺灣山岳會　彙報八月、九月號
日本旅行協會
ツウリスト八月、九月號
やまびこ會　やまびこ
登山とスキー社　登山とスキー八月
地學協會　地學雜誌八月號
築地山岳會　堆石八月號
關東山岳會　會報　〃
東京雪嶺會　雪嶺　〃
國立公園協會　國立公園七、八月號
大阪探驅倶樂部　白峰八月、九月號
熊本アルカウ會　會報
關西徒歩會　會報
山聲會　三角點
廣島山岳會　會報
東京アルカウ會　アルコウ
明峰山岳會　MMS
昭和山岳會　會報
東京野歩路會　會報九月號
東京峰友グルッペ　季報二號
日本アルカウ會
アルカウ趣味第二十七年第五號
東京帝大スキー山岳部　部内雜誌
一九三六年號及一九三九年號
横濱山岳會　會報八月九月
日本厚生協會　厚生の日本八月九月
東京山ノ會　ピッケル九月號
東京市役所山岳部　部報八月九月
東鐵やまをとこの會
VORWARTS九月號
日本雪線山岳會　雪線九月號
武藏山岳會　登山九月號
厩城歩行會　歩行者第三號
日本ハイキング倶樂部
NHC二十號
朋文堂　山小屋八月九月
東京登歩溪流會　會報九月號
筑紫山岳會　つくし九號
京都山岳會　京都山岳九月號
雪線社　雪報第一〇八號
ローマ字ひろめ會　ローマ字九月號
阪神山岳會　山幸七九、八〇號
中京山岳會　ベルグロイテ二十一號
（御嶽地獄谷報告）
The Mountaineer
No, 8, No. 9, No. 10. 1940
Planinski vestnik
Geographical Journal
June, July, August, 1940
Ladies' Alpine Club: 1940　1940
Appalachina　No. 8 1940
Die Alpen　Juli, August. 1940
Himalayan Journal
VOL. XII. 1940
Trail and Timberline
No. 280 (August) 1940

代表者變更

北海道帝國大學文武會山岳部
代表者　伊藤秀五郎

寄贈圖書

上高地（筑摩電鐵發行）
積雪期登山（藤田信道著）
スキーイング教程
（東京帝大スキー山岳部編）
祖母岳（百溪祿郎太著）
登山（田中薫著）
スキー術早わかり（丸山晩霞著）

あとがき

會報の編輯を始めましてから五ケ月、その間どうにかキチン〳〵と出して參つた心算りです。それにしても原稿は矢張不足勝ちで御座いますから、精々多數の方々に御執筆をお願ひ申し上げます。別記の通り第百號は少し頁數の多いものを出し度いと思つてをりますので、此の際特に御寄稿を御願ひ致します。

昭和十五年十月一日印刷
昭和十五年十月五日發行
東京市杉並區馬橋二ノ二四〇
編輯者　望月達夫
東京市目黒區中目黒一ノ七四二
發行者　塚本繁松
東京市芝區琴平町一（木二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電話芝（四三）一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者　植田庄助
印刷所　成文堂印刷所